
ピーナッツの日

小出 あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピーナッツの日

【Nコード】

N4205F

【作者名】

小出 あかり

【あらすじ】

11月11日。主人公の彩葉は、恋人にプレゼントを貰った。だがその日は誕生日でもつきあい始めた記念日でもない。恋人の真意は・・・。

会社の昼休み。

ビジネススーツに身を包んだ岸川彩菜は、ビルの一階にある本屋で恋人の滝本航平を待っていた。彩菜は雑誌コーナーを一回りすると、ファッション雑誌の平棚から1冊の雑誌を手にとり、ぺらぺらとページをめくり始めた。

しばらく雑誌を読んでいると、突然後ろから声をかけられる。

「ああ、いいね。この服、彩菜に似合うと思うよ」

航平は彩菜の横に立って、彩菜が見ているページを指さした。

彩菜もすぐに航平に気が付き、言った。

「急に呼び出すから驚いたよ。携帯のメッセージに気付かなかったら、今日は会えなかったかもしれないのに」

「会えなくても良かったんだ。突然思いついたから、メールしただけなんだ」と航平。

「じゃあ、ハイ、プレゼント」

航平は持っていた平たい小箱を彩菜に渡した。

きれいな包装紙に包まれ、リボンのかった箱を彩菜は受け取る。とまどう彩菜。

「え？ 何？」

「だからプレゼントだよ」航平は言った。

「プレゼント？」

彩菜は首をかしげる。

今日は11月11日の火曜日。誕生日でもなければ、つきあい始めた記念日でもない。

「ええっと……今日って誰かの誕生日だったっけ？」

そして彩菜はあっと声をあげた。

「ゴメン。もしかして航平の誕生日？」

航平は笑って答える。

「ちがうよ。誕生日は関係ない」

「何かの記念日？」と彩葉は聞く。

「うん、特別な日だ」と航平。

「特別な？ 私なにか忘れてる？」

すると航平はポン、と手を叩き言った。

「それはそうとして、昼飯を食いに行こう。この近くに新しくハンバーガーショップが出来たんだ。ちょっと高いけどね、オーダーしてから焼いてくれる本格的な店なんだよ」

彩葉もすぐにうなずいた。

「いいね、そこ行ってみよう」

航平と彩葉は本屋の自動ドアを抜け、駅とは反対方向の、住宅街の方に向かって歩きはじめた。

狭い店内の窓際の2人席に座った航平と彩葉は、ハンバーガーが出来上がるのを待っていた。肉の焼ける香ばしい匂いが店内を包み込み、食欲中枢を刺激する。隣の席ではすでに食べている最中の客がいて、ファーストフードのものよりひとまわり大きな、バンズから肉がはみ出しているチーズバーガーをおいしそうにほおぼっていた。

航平はそれを横目で見て、彩葉に囁いた。

「期待出来そうだろ？ この店、絶対うまいって」

だが、彩葉は「うん……」と生返事で答える。

「そんなことよりも、今日はいったい何の日なの？ そっちの方が……」

「気になる？」と航平。

「うん」と彩葉。

航平は言った。

「僕はね、何もない日を記念日にする魔法を持ってきたんだよ」
そして航平はカバンの中からポッキーをとりだした。箱を開けると4本のポッキーを手に取り、机の上に並べた。

「何に見える？」

「1が4つ」

「そう。ポッキーを4本並べると11が2つに見える。だからグリコは1999年に、11月11日を『ポッキーとプリッツの日』と制定したんだ」

彩葉は腑に落ちないといった顔で聞いた。

「だからプレゼントなの？」

「気に入らない？」

「気に入らないも何も……」

彩葉は言った。

「プレゼントの理由にはなっていないわ」

すると航平はさらに言葉を続けた。

「じゃあ『下駄の日』だ」

彩葉はすぐにピンと来た。

「分かった。下駄の足が並ぶと11、11ね」

「あたり。これは伊豆長岡観光協会というところが制定したんだそうだよ。その他にも、『もやしの日』『煙突の日』『きりたんぽの日』なんてのもある」

「なんで？　なんで11月11日が『もやしの日』なの？」

航平は答えた。

「もやしは4本並べて1111。煙突も4本並べて見立ててる。きりたんぽも同じで……」

彩葉が言葉を遮った。

「そんなこと言ったら、真っ直ぐなものなら何でも記念日になっちゃうわ。エンピツでも箸でもつまようじでも」

「ところが、みんなちゃんと制定されているところが面白いんだ。他にもね、『電池の日』とか『鯉の日』なんてのもある。『電池の日』は土で11だから。鯉の日は魚ヘンの右が圭の字でこれまた11が2つだから。モヤシ4本よりはヒネリがあるだろ？」

彩葉は顔をしかめた。まあ、言われてみればそうだけど……そんな

なことをつぶやきながら、彩葉は航平に向き直って言った。

「でもね、やっぱりそれってプレゼントの理由にはなってないような気がする」

「じゃあ……」

航平がそう言いかけた時、店員がハンバーガーを運んできた。それを見た航平は一言、

「まずは、できたてを頂いてからにしようか」

と言った。そして2人は藤のカゴに入ったハンバーガーの包みを手に取った。

店内は混み始めていた。入り口には待っている客が列をなしている。彩葉はそれを見て言った。

「ちようどいい時に来たんだね」

「僕らは、タイミングが良かったんだよ」と航平。

彩葉は大きなハンバーガーを必死に頬張りながら言った。

「ところでさっきの話だけど、『もやしの日』ってのが良く分からないよね。4つ並べるなんて、こじつけくさい気がする」

それを聞いた航平はハハハと笑う。

「欲しいのは口実さ。普通の日を特別な日にするための。人は理由を欲しがる生き物だろ？ 記念日をつくりたい人の気持ちを考えてごらんよ」

「記念日をつくりたい人の気持ち？」と彩葉。

「うん。4つ並べるのはこじつけでも、記念日は記念日なのさ。そしてみんなが祝うんだ。記念日は普通の日だった今日を、特別な日にできる魔法なんだ」

それを聞いた彩葉が言った。

「そうよね。記念日とまではいかないけれど、一見普通の日に見えても今日はもしかしたら誰かの誕生日なのかもしれないんだよね。365日あったら、毎日が誕生日なんて……そう考えると面白いね」

そして彩菜はふと、『不思議の国のアリス』の一節を思い出した。
「不思議の国のアリスでは、『生まれない日バンザイ』と言って、誕生日でない日を祝うの。364日プラス誕生日で毎日記念日なんて、それだけで楽しいのかも」

航平もうなずいた。

「ああ、いいね。記念日は毎日を楽しんでくれるコツかもしれない」

彩菜がハンバーガーを食べ終わった頃、航平がポテトをつまみながら言った。

「そうだ、プレゼントの包みを開けてみるといい」

彩菜は航平に言われるまま、プレゼントの包みを開け始めた。

中から一足の靴下が出てきた。

「靴下？　なんで？」

「何でだと思う？」航平はチェシヤ猫さながらに、ニヤニヤしながら言った。

「11月11日は『くつしたの日』でもあるの？」と彩菜。

「あたり」と航平。

ちよつと考えこんで、彩菜は聞いた。

「もしかして靴下も2足並べて1111？」

すると航平は机に腕をつきながら言った。

「うん、けどね彩菜。よく考えてみて。靴下をどうして2足並べる必要があると思う？」

「何か理由があるの？」彩菜が聞いた。

航平が答える。

「この『くつしたの日』は日本靴下協会が制定したんだけど、『くつしたの日』は『もやしの日』とは違うんだ。『くつしたの日』には、別名があるんだよ」

「別名？」彩菜が聞く。

「そう。『恋人達の日』っていうんだ」

航平が説明を加える。

「日本靴下協会の人は、恋人同士で靴下を贈り合おうと呼びかけたんだ。だから2足並べて1111なんだよ。今日は僕らの日なんだ」
「それが言いたくて、わざわざ来たのね」

彩菜はやつと理解し、そしてあきれた。

「でもね、ありがとう。寒くなってきたから、これは家で履くことにする」

そう言いかけて、彩菜はあつ、と声をあげた。

「そうだ！ 私も思い出したわ」

今度は航平が聞き返す番だった。

「何を？」

すると彩菜が言った。

「今日は『ピーナッツの日』でもあるのよ」

「『ピーナッツの日』？」と航平。

「そう。11月11日あたりから、ピーナッツの出荷が始まるからなんだって」

彩菜はストローでオレンジジュースを一口飲んでから、言葉を続ける。

「でもね、ピーナッツって同じサヤに2つ入っているでしょ？」

「うん」と航平。

「それを分けて食べるのって恋人同士っぽくない？」と彩菜。

「そうだね」と航平。

「私は『くつしたの日』よりこっちの方が『恋人達の日』って感じがしていいと思うんだ」

それを聞いた航平は笑って言った。

「11月11日は『ピーナッツの日』か。いいね。『僕らの日』って感じでいいと思うよ」

彩菜も付け加えて言った。

「今日はビールで乾杯ね。会社が終わったら、コンビニに寄って柿ピーでも買って帰ろう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4205f/>

ピーナッツの日

2010年10月8日15時10分発行